

炭焼きの 与助

【その五】

作：近藤せいけん



炭焼き 与助 その五 (与助豆腐)

豆腐作りに、毎日没頭する、与助であった。

「おいしい、しかも、安くいい物を作ろう。良吉親子のため、長屋の衆の生計がたてれば」

厚木宿にゆくと、豆腐を買い食べて、熱心に研究に励んだ。

貧乏長屋に立ち寄ると、良吉、きくを連れ、長屋の衆と話し合い、少しずつ、形が出来てきた。大家さんの初吉さんは貸家の改築を進め、いろんな道具を集めてくれた。

「この長屋が、町衆のためになる。こんな良い事があるだろうか。長生きしててよかった」

漁師の貝さんは、平塚の海で海水を汲み、それを煮つめ、「にがり」を製造した。

「豆腐作りには、いいにがり、がなくちゃ、豆腐にならない。

何回も煮なおし、「にがり」の上等品を作ってやる」

「まかしておけ」と張り切っている。

おかみさんたちは、与助が運んできた大豆をよく冷たい水に約一昼夜つけ。ふやけた大豆を、大きな釜で煮、強火、中火、弱火の火加減になれるまで、時間を費やした。うすで引き、豆乳を作り、残った、かすが、「おから」。豆乳ににがりを入れる、その工程も難しく、分量、布こし、いろいろと苦勞をしていた。

何回も、何回も、繰り返し作っては壊し、形を整えたり、味、風味を試食をした。

与助の指導を受けながら、熱心な作業が毎日続けられた。

長屋の衆は工場集まって、夜更けるまで、いろんな意見をたたわせて、どうした

ら「おいしい」豆腐が出来るか、研究し合った。

皆が生き生きと、希望に満ちた日々を過ごしていた。

やがて季節は冬から春へ変わろうとしていた。

貧乏長屋に与助をはじめ、大家の初吉、漁師の貝、棒振りの金治、大工の富め、おかみさんたちが集まり、いろいろと練り上げた、豆腐の試作品を食べ比べていた。

「どうだ、この豆腐は、とても良く出来ているじゃないか」

「うん、味もいい。色もいい。」

「固さも適当。おいしい～」

「ううん、おいしい」

「本当だ、とてもいい、おいしい」

「これであれば、どこに出しても、勝負出来る」

与助がうれしそうに歓声をあげる。

「やっと完成した。皆の衆の努力が実った。すごい」

「さあ、皆の衆。いよいよ「豆腐、おから」の販売にはいります。これからが真価が問われます」

「がんばりましょう」

いよいよ三日後から、「豆腐、おから」の販売が始まる。

改造した貸家の店舗、寺のお和尚さまにお願いして、書いてもらった、真新しい看板が掲げられた。

看板は変わったもので、「心づくり」「豆腐、おから」と掲げられていた。

開店初日。早朝から長屋総で準備に入り、夜明けの開店に備えた。

棒振りの金治が、豆腐、おからを荷につけて、町に売りに。

うわさを聞いて、ご近所の町衆が買いに来てくれた。

最初に用意した、豆腐、おからはすぐに完売した。

町の評判となり、日を追うごとに、客は増え、一カ月後には

最初の頃の数倍の売れ行きとなった。

大家の初吉は「う、わあ～驚いた。こんなに売れるとは、忙しくて寝る暇もない。えへへへ」

おかみさんたちも、売れゆきに驚き、うれしい悲鳴をあげていた。「こんなに、売れるとは、一生懸命やって良かった。かなりの収入が入り、楽になった」

「何たって、生きがいがある。有難いこと。」

「与助さんのおかげ。本当に有難い。救いの神じゃ」

評判は評判をよび、益々、売り上げは伸び、亭主たちも本格的に商売にあたるようになった。

与助は原料の大豆を近郊の村を回って集め、貧乏長屋に運んだ。

町の料理屋、宿、武家のお得意様も増え、おいしくて安いと毎日のように買い付けてくれた。

与助は仕入れに必要な経費を除き、長屋の衆に公平に利益を分配した。皆は仕事に生きがいを感じ、いい「豆腐、おから」を日夜、研鑽して作りあげた。

ある日のこと、与助は煤ヶ谷村（すすがやむら）の寺の和尚さまを訪ねた。

「お和尚さま、大変有難うございました。お陰さまで「豆腐、おから」の製造、販売は順調で益々売れています」

「忙しすぎて、長屋の衆も休む暇も無いほどです。皆がお和尚さまに感謝しています」

「そうか、それは良かった。この成果はおぬしのがんばりにようもの、拙僧ではない。与助、おぬしの人に尽くす真心が天に通じたのじゃ」

「人は一人では生きられぬ、人という字のごとく、ひとに支えられて、人は生きるもの。おぬしはそれを実践した」

「この豆腐がこれからも、人々に受け入れられて広く流布されるためにも、日々の努力、長屋の衆の和が大切」

「与助、これからが大事。見事に成し遂げよ。成功するか、しないか、おぬしの前途にかかっている」

「はい、やります。全身全霊でがんばります」

「それは良かった。わははは、は」

「与助。この豆腐の名をつけて進ぜよう」

「え、本当です・・・」

「おぬしの名をつけて、「与助豆腐」という名をつけよ」

「へーえ～私の名ですか・・・恐れおおい～」

「いや、おぬしの励みとして、冠をつけるのじゃ」

「よき、名じゃ」

「そして、世のため、人のため生きるのじゃ。よいな一」

与助はただ、ただ頭を下げるのみであった。

貧乏長屋の「与助豆腐」、広く大山の見える地方に永く

愛されていった。